Tessa Morris-Suzuki
テッサ・モーリス-スズキ
オーストラリア国立大学教授

国際文化会館の庭園

@Tokyo

卒業式・入学式のころになると国際文化会館の庭に、緋毛氈が敷かれた長椅子が置かれる。活字に疲れて図書室を出てくると、その長椅子に坐り、庭園をぼんやりと眺めるのが好きだ。抹茶は苦手なので、ウエイターにコーヒーを註文する。

新芽が吹き出した木々は、緑色の濃淡となった縞模様の小枝を、春風に揺らす。このお庭はそれほど広くないのだが、起伏に富んだ土地に絶妙の配置で木々が植えられてあり、ずっと眺めていても少しも飽きない。疲れた眼が、少しずつ回復していくのを感じる。

国際文化会館は東京・六本木にある。六本木の交差点から外苑東通りを飯倉方向に向かい、白いロア・ビルの先にある細い道（鳥居坂）を右折すれば、歩いて3分ほどのところだ。でも、六本木の喧騒は、このお庭まで届かない。

ついでだけれど、鳥居坂の一本西側の道は芋洗坂で、一本東側が於多福坂と呼ばれる。通りの名にも、江戸期の名残が色濃く残った一帯だ。

幕末のころ多度津藩主京極壱岐守の江戸屋敷だった場所に、国際文化会館はある。壱岐守の江戸屋敷は、明治初期に井上馨侯爵家に譲られ、その後、久邇宮、赤星鉄馬、岩崎小弥太と所有者が変わった。香淳皇后は、ここで生まれている。敗戦後国有地となっていたものが払い下げられ、国際文化会館が建てられた。

わたしのように、日本近代史を専攻する者にとっては、綺羅星のような名前がぞろぞろと並ぶ。歴史は断絶を拒み、連綿と続いている。

現在のお庭は、それほど古くなくて、昭和5年（1930年）の造成だ。岩崎小弥太が、京都の名造園家「植治」こと7代目小川治兵衛に依頼してつくられたものだ、と会館の説明書にはあった。桃山期そして江戸初期の庭園を復元したらしい。

春は花見、夏は夕涼み、秋は紅葉、冬は雪見。

移ろいゆく四季に、このお庭は、ぴったりと、そして時には厳粛に呼応する。幸いなことに、わたしはそのすべての時季にこのお庭を楽しんでいる。

会館のホールで結婚式でもあったのか、まるで日曜日に教会に行くかのように盛装した子どもたちが、芝生の上を駆け回っていた。静寂は破られても、駆け回る子どもたちは風景に溶け込み、それがちっとも不快に感じられない。

風に舞ったソメイヨシノの花びらが、コーヒーカップの中に落ちた。浮いている花弁をスプーンで除くと、わたしはコーヒーを口に含んだ。